



薬袋 奈美子 研究室
Namiko Minai Lab.

Profile	Works
1992 日本女子大学家政学部住居学科 卒業	2010 多摩市都市計画審議会
1994 東京都立大学大学院工学研究科 建築学専攻 修士課程修了	2011 高津区地域コミュニティ施策推進事業
1999 東京都立大学大学院工学研究科 建築学専攻 博士課程修了	2012 NPO 法人 ぐらすかわさき理事
2002 福井大学工学部建築建設工学科 講師	2021 NPO 法人 地域防災推進機構副理事長
2009 日本女子大学家政学部住居学科 講師	2016 「自分にあわせてまちを変えてみる力」明文社 「生活の視点でとく都市計画」彰国社
2012 日本女子大学家政学部住居学科 准教授	2017 「新・家庭基礎21」実教出版
2018 日本女子大学家政学部住居学科 教授	2021 「住まいの百科事典」丸善出版 等

「住まい手の生活を豊かにするまちづくり」

薬袋研究室では、生活を豊かにするためのまち・村・地域づくりを考えています。自然と上手く共生し、人と人の出会いを楽しみ、充実した気持ちで生活をできる空間づくりを応援・研究します。生活道路の使い方、緑のあるまち、防災、住教育、郊外住宅地の住環境等を切り口にしています。



生田緑地

現地訪問を通じ、生田緑地は自然豊かで良い場所であるにもかかわらず、園内にある施設の管理者が異なり、施設同士の関係が希薄であることがわかりました。そこで、施設同士をつなぐ取り組みとして、今回は日本民家園とかわさき宙と緑の科学館の2つを取り上げ、来館者に両施設を訪れてもらうための工夫として子供向けのワークシートを作成しました。日本民家園で3グループに分かれ、作田家、水車小屋、清宮家を対象として地理や生活、周辺に生息する生物、地形や治水の歴史等の内容をクイズ形式やマップにまとめ、周辺の住環境や暮らし方について、科学館と関連した教材を作成しました。現在、作成したワークシートを施設に置いてもらうことを目標に改善を重ねています。1年生の設計の授業で日本民家園には訪れたことはありましたが、生田緑地の他の施設については知りませんでした。この活動を通して感じた生田緑地の魅力がワークシートを通じて子供たちに伝わり、生田緑地の豊かな自然環境の中で楽しく学ぶ手助けになればと思います。（担当3年生 執筆 中村真沙美）

郊外住宅地

地元自治会、行政、まちづくり財団、他大学などのご協力をいただきながら、川崎市麻生区の旧細山村地区や地域ルール策定地区について、防犯や職住近接、地域ルール、住宅の外観など様々な切り口から郊外住宅地の持続可能性についての研究を行っています。防犯面では、丘陵地であるため、防犯面が不安な住宅地では住民同士のコミュニティや見守りによって犯罪抑止力を向上させることが重要です。また、事業所兼住宅の実際の数が自治体が把握するよりも多い可能性があることから、自治体が把握する以上に職住近接が実現している可能性があること、戸建の事業所兼住宅について、会社だけでなく学習塾や医院等が存在し、駅からの距離に関わらず様々な場所で事業を行っており、地元住民が顧客・働き手となる事業が多いことが明らかとなりました。まちの中で生活が循環し、まちの持続につながるため、外部から人を呼ぶ事業所よりも、まちの中に住む人が顧客・働き手となる事業所が必要であることがわかりました。（担当 加藤りさ・北原理央 執筆 山村莉歩）

未来遺産

雑司が谷未来遺産協議会は、2016年から雑司ヶ谷地域の方々とワークショップやシンポジウムを積み重ね、雑司ヶ谷の未来遺産（歴史的建造物等）を伝えるための活動に取り組んでいます。今年度は、2022年度から取り組む雑司ヶ谷地域らしい案内サインの設置に向けて社会実験を行い、社会実験では計31個の案内サインの設置と撤去を、各町会の住民の方と雑司が谷未来遺産協議会と共に行いました。社会実験と同時期に行ったアンケートでは、案内サイン設置箇所の周辺で住民の方々に直接話しかけ、活動内容の説明とアンケートへの回答にご協力いただきました。アンケート調査の結果を地域の方々に伝えるための報告書も作成し、今後も案内サインの設置に向けて取り組んでいく予定です。実際に多くの人の意見に触れ、雑司ヶ谷の方々のまちへの関心の高さに驚きました。自分の雑司ヶ谷というまちへの関心が高まるきっかけにもなりました。住民の方との交流を自ら深めることができ、主体的な学びに繋がったと思います。（岩上綾夏 中川晴賀）

主な卒業論文・修士論文

- 卒業論文：「まちへの意識とコミュニティバスの倫理的消費に関する研究—町田市玉川学園地域を対象として—」 太田千智 2021年度
- 「雑司が谷における滞留行為の現状と滞留場所」 沖田菜裕子 2021年度
- 「子どもの遊びと遊び場選択に関する研究」 鈴木舞衣 2021年度
- 「日本女子大学の学寮における家具・什器—覧化と考察—明桂寮を対象として—」 藤井美羽 2021年度
- 「近接する公園の連携整備計画についての研究—雑司が谷の7つの公園を対象として—」 安本萌恵 2021年度

研究室の雰囲気を表す一言：まちや暮らしに触れて、人と関わる楽しさを見つけられる研究室

他大学研究室との合同ゼミ

今年度は立命館大学の都市計画研究室（岡井ゼミ）と合同ゼミを行いました。1日目は明日館で豊島区や財団の方を招いてレクチャーを受け、グループに分かれて実際に街を歩きながら池袋の魅力を探索し、より暮らしやすい街にしていく提案を話し合いました。2日目はグループごとに発表を行い、さまざまな視点で池袋のまちの魅力を発信することができました。コロナ禍において、なかなか外での活動や交流ができない日々が続いていたため、リフレッシュしながら新たな知見も得ることができ、薬袋研の学生同士でも学年を超えた先輩後輩の交流の機会となりました。タイトなスケジュールではありましたが、濃密な2日間を過ごすことができました。

（中山由梨亜）



2021年度の修士論文・卒業論文

災害直後の避難生活・復旧支援のための都市公園における役割 —東京都特別区を対象として—

石田 雅美 修士論文



本研究では、災害直後における在宅避難者への避難生活支援に着目して、都市公園の位置付け及び復旧時に必要な支援を検討した。行政計画では、災害時における公園の役割は災害からの被害軽減、震災後には災害廃棄物置場としての活用が想定されているに留まっている。水害からの復旧時には日常生活で使用するような掃除用具や雑巾等が活用されるが、調達に困難になる可能性を想定し、迅速な復旧のためそのような物資の配布場所や土のう置場としての公園活用が考えられる。公園は行政と住民が協同で管理できる場所であるという特性を活かし、立地・災害への備えを検討事項に入れた公園計画が必要であることが明らかとなった。

生活行為を許容する道路の選定方法と標識類設置の効果に関する研究 —東京都23区を対象として—

大山 祐加子 修士論文



立ち話や中央歩行、遊び等の生活行為を許容する住宅地内道路の選定方法と標識類設置の効果、東京都23区を対象に整理しました。現状として統一的な基準や滞留空間創出を目的とした道路分類は存在しない一方、住宅地内道路に対しヒエラルキーを設けることは可能であると確かめられました。また、標識類には通行者の注意啓発効果はあるものの、目に留まりづらく、生活行為促進効果が十分とは言えないことがわかりました。道路分類の導入に際しては標識類と合わせて注意喚起を促すようなサインや補助標識の設置等を行うことで、住宅地内の道路にヒエラルキーを設け生活空間の延長として生活行為を促すことが可能と言えます。

1950年代以降建設されたマーケットについて —雑二ストアを対象として—

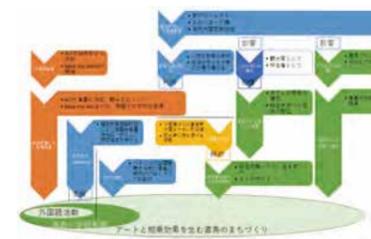
林 千紗 卒業論文



本研究では1950年に戦災復興土地区画整理事業が行われた後も都心部に集積した住宅地の暮らしを支える日常的な買物の場として発展したマーケットについて雑二ストアを対象とし研究を行いました。マーケットとは複数店舗が集合した低層の商業施設です。実測調査から営業内容に合わせた店舗づくりや間取りの変化が行われ、ヒアリング調査から地域の声を反映した商品展開で重要な買物の場であり、日常的な交流の場でもありました。現存した理由として「土地の共有化」「立地の良さと個人商店が密接し、木造アーケードによる特有の空間」「住まいと仕事場が一体となり集合し生まれた権利者・地域の人の良好な関係性」の3つが明らかとなりました。

アートプロジェクトの影響を受けた直島のまちづくり

吉本 華 卒業論文



1990年代後半から現代アートを活用した地域再生の取り組みが全国で増加した中で、直島ではアートプロジェクトによる地域振興が行われています。実際にアートプロジェクトが地域住民の生活にどのような影響を与えたのか、現地でのヒアリング調査を行った結果、「アートプロジェクトの影響で地域住民の文化活動が活発化したこと」「小学校教育では昔から力を入れている英語教育にアートが教材として利用されていること」などがわかりました。特に、移住者が住民支援を行なっていることが特徴的であり、これは直島町役場や直島の歴史的背景が大きく起因すると考えられました。